

NPO (特定非営利活動法人)

映画美学校

THE FILM SCHOOL OF TOKYO

フィクション・コース 第29期初等科

募集要綱

Fictional Film Production
Elementary Course

2025

特定非営利活動法人「映画美学校」設立時の趣旨書

「映像の時代」といわれる 20 世紀は、映画、テレビ、ビデオなど多くの映像作品を生み、豊かな文化を育んできました。今日の私たちは、意識するか否かを問わず、大量の映像に囲まれて暮らしています。

このような状況のもとで、与えられた映像をただ享受するばかりでなく、自らが表現者となって作品を制作し、世に問いかけていくことを望む人々が、社会の各層に増えています。企業や組織に属することのないこういった創作活動は、自主制作といわれ、私たちを取りまく映像環境を活性化させる行為として、映画史的にも重要な意味をもってまいりました。今日高い評価を受ける世界の映画作家の多くが、自主的な創作活動を出発点として自らの方法論を切り開いてきたことはよく知られています。しかしながら、このような創作を目指す人々にとって、映像表現の基礎と実際を学び、自らの表現方法を発見するための場を確保することは、極めて困難なことでした。誰もが、何歳からでも、それまでの経験を生かしながら、本格的な映像の表現者としての道を歩むことができる。そういった環境の整備が、今求められているのではないのでしょうか。

私どもはこのような現状を踏まえ、1997 年に映画技術美学講座を開講いたしました。そして、翌 1998 年より「映画美学校」という任意団体を組織して、広く市民を対象に、映画やビデオなどの映像制作についての基礎的な知識を教授し、すぐれた作品には国内・国外での発表の機会を設けてまいりました。青年層から熟年層まで、多様な社会的キャリアをもつ人々が、映像表現の理論と技術をしっかりと学び、質の高い作品を創造していく。そういった環境を用意することは、さらなる技術の開発とそれに伴う映像表現の進化が予想される 21 世紀の映像文化を豊かなものにしていくと考えます。

以上の理念にもとづき、映画・映像の分野における自主的な創作活動を、教育を通じてサポートする団体として、私どもは特定非営利活動法人を設立いたします。(1999 年 11 月)

設立者代表	堀越謙三（ユーロスペース代表）
	松本正道（アテネ・フランセ文化センター代表）

映画美学校

映画美学校は、シネクラブの活動や映画祭の製作を通して世界の映画を紹介し続けてきたアテネ・フランセ文化センターと、映画製作、配給、興行を行ってきたユーロスペースとの共同プロジェクトとして1997年に発足しました。翌98年に中央区京橋に教室を移転。2000年4月に東京都より、NPO(特定非営利活動法人)に認証されました。10年には渋谷区円山町KINOHAUSに移転し施設の充実をはかりました。

映画美学校はフィクション・コース(初等科・高等科)、ドキュメンタリー・コース(休止中)、映像翻訳講座(基礎科・演習科)、アクトーズ・コース(俳優養成講座)、脚本コース(初等科・高等科)、言語表現コース(ことばの学校基礎科・演習科)、映画上映者養成講座を擁しています。昼間働いている社会人も参加できるよう、講義はそれぞれ平日の夜間、あるいは土曜日、日曜日の昼間に行なっています(一部コースを除く)。

現在、多くの映画美学校修了生が映画作家やスタッフをはじめ、映画に関する様々な場面で活躍しています。

映画美学校設立母体

■ アテネ・フランセ文化センター

●外国語学校アテネ・フランセの国際交流部門として1970年に設立。映画による国際交流を目的に世界各国の映画を上映している。技術開発にも力をいれており、コンピュータを駆使した字幕投影システム(S.P.S.)を開発。この技術提供を軸に全国各地で行われる映画祭や美術館関連の製作業務も行っている。89年日本映画ペンクラブ賞、94年日本映画ペンクラブ奨励賞受賞。

●中心となるシネマテークの活動では、「古典映画の再評価と同時代作家の発見」をテーマに、世界の映画を上映するとともに、国内外の映画人を招聘。上映と並行して講演会やシンポジウム、ワークショップなどを行っている。1年間の総上映本数は約200本。講演のいくつかは、「淀川長治映画塾」(講談社文庫)、「シネクラブ時代」(フィルムアート社)としてまとめられている。配給作品としてクリス・マルケル『サン・ソレイユ』、『アレクサンドルの墓』、ダニエル・シュミット『人生の幻影』、フレディ・ムーラーによるH.R.ギーガーの記録映画『パッサーゲン』、ストローブ＝ユイレ『労働者たち、農民たち』『ルーヴル美術館訪問』、ペドロ・コスタ『映画作家ストローブ＝ユイレ／あなたの微笑みはどこに隠れたの?』、ロベール・ブレッソン『罪の天使たち』など。

●2013年10月、アテネ・フランセの学校法人化に伴い、デジタル化に対応する技術開発を一層加速させるためアテネ・フランセ文化事業株式会社を設立、文化センターは同社が運営する非営利上映団体として活動を続けている。

(アテネ・フランセ文化センター代表／松本正道)

■ ユーロスペース

●1977年にシネクラブとして発足し、同年に「ドイツ新作映画祭」を開催。ヴィム・ヴェンダースら、現代ドイツを代表する監督を日本に紹介する。その後もヨーロッパおよびNYインディペンデント、アジア映画の新作を中心に輸入公開を続ける。82年にミニシアター「ユーロスペース」を開館、今日のミニシアター・ブームの草分けとなる。2006年に現在の円山町に移転。

●新しい才能を次々と発掘することで知られ、日本に初めて配給した監督にはヴィム・ヴェンダース、デイヴィッド・クロネンバーグ、レオス・カラックス、ピーター・グリーナウェイ、ペドロ・アルモドバル、張芸謀、アッバス・キアロスタミなどがいる。

●1992年から製作も手掛け、ウェイン・ワン『スモーク』、ダニエル・シュミット『書かれた顔』、ジャン＝ピエール・リモザン『TOKYO EYES』、B・フドイナザーロフ『ルナ・パパ』、フランソワ・オゾン『クリミナル・ラヴァーズ』、レオス・カラックス『ポーラX』『TOKYO!-メルド-』、アッバス・キアロスタミ『ライク・サムワン・イン・ラブ』などの作品がある。

(代表／堀越謙三)

映画美学校フィクション・コースとは

● 今、求められているのは映画に対する柔軟な姿勢です。

近年のデジタル技術の発展・普及は、映画づくりに大きな変化をもたらしています。家庭用のビデオカメラやスマートフォンで撮影し、パソコンを使って編集するといったことで、より多くの人が個人的に「作品」を手にする事ができ、またそれらを世界に向かって配信することすら可能になっています。また、そのような極めて小規模な作品が、国際的な映画祭で高い評価を受ける、といったことも決して珍しいことではなくなっています。しかし、その一方で、大規模な専門的分業体制で行われる作品製作の形体も、依然主流としてあります。そのような製作現場では、やはり映画製作の一定の知識・技術が必要とされています。このように映画製作が多様化する昨今においては、あらゆる状況に柔軟に対応していこうとする姿勢が重要になってきています。

● 映画美学校は「新しい映画」の創造を目指します。

映画づくりには多数の選択肢が存在します。その選択肢の数だけ可能性を秘めているといえるでしょう。しかし「こうあらねばならない」といった、一定の美学や概念でその可能性を閉ざしてしまえば、映画づくりはルーティン化した退屈なものになってしまうでしょう。映画美学校は、どのような映画のつくり方が最良の方法なのかを再検討する場として、あるいは、作品の質や規模に見合った、より臨機応変な映画づくりを創出する場として機能することを目指しています。受講生にとっても、また、講師陣にとっても「こういうのはどうだろうか」、「ああいうのはどうだろうか」というふうに常に可能性を模索することのできる学校でありたいと考えています。



● 学生と社会人のための映画学校です。

映画美学校は全日制の学校ではありません。昼間学校に通っている方や働いている方でも参加できるよう、講義は週2〜3日、平日の夜間、あるいは土・日・祝日に行います。これまでに18歳から60歳代まで、個性豊かな人材が集まりました。通常の学校ではありえないそのネットワークが、作品の力に結びついています。

映画に関心を寄せながら今まできっかけをつかめなかった人、これまでたずさわってきた専門分野を映画の中に生かしてみたい人、映画業界という既成の枠にとらわれない映画づくりについて考えている人など、様々な受講生がこの学校に集まることを期待しています。もちろん、そこで蓄積されたエネルギーが、実際の制作現場にフィードバックされるのであれば意味がありません。開講から27年が経過した現在、様々な制作形態を試行する中で、300本におよぶ長・中・短編作品が制作されてきました。そこで生まれた作品の多くが日本の映画界や海外の映画祭で大きな反響を呼び、映画美学校はプロダクション機能を持った新しい教育機関として広く注目を集めてきました。



● 初等科は映画づくりが初めての方を対象に、映画の基礎を学ぶカリキュラムです。

映画制作を学ぶことは、知らない言語を学ぶことに似ています。映画には映画特有の「文法」が存在し、言語を喋るように映画の文法でドラマを語る必要があります。文法を学ぶ時には2つの方法があります。一つは文法の教科書にしたがって学ぶ方法。もう一つは外国のひとと、とにかく外国語を喋って、体で覚える方法です。映画美学校は後者です。短い期間の中で、まずは撮ってみる。そして撮った映像を見て議論する。その繰り返しの中で「体験的に」映画文法を学んでいきます。

初等科は未経験の方が対象です。カリキュラムは大きく分けて2つの分野から成立しています。撮影、照明、録音、編集など映画制作に必要な技術を幅広く体験的に習得していく「技術分野」と、シナリオの書き方、読み込み方、演出技術を学ぶ「演出・脚本分野」。これら2つの分野の指導を第一線で活躍する講師陣から受け、時には受講生間で議論を行うことにより、演出力・脚本力・技術力が身につけられるようになっています。そうして、カリキュラム前半の集大成として「総合実習」で短編映画を作ります。

カリキュラムの後半では、希望者一人一人が、同じ初等科生とともに、15分の短編を制作します。完成作品は上映会を行い、優れた作品は劇場で上映会を行います。



● 高等科は、どこに出しても通用する本格的な映画をつくることを主眼においたカリキュラムです。

高等科では、初等科での経験をふまえ、より専門的で実践的な映画づくりの技術を学び、企画力、脚本力、演出力により磨きをかけていきます。講義の中で開発された優秀企画は修了制作作品として、制作から上映までをサポートします。

● 修了生に対するサポート体制も充実しています。

初等科・高等科とも、優れた作品には海外の映画祭への出品や劇場公開などを積極的にサポートしていきます。また、高等科修了生を対象とする研究科は、ひとりひとりの映画づくりをサポートする恒常的な場として、また当校の“プロダクション機能”をにう人材育成の場として設けられています。その他にも修了生の自主制作作品を上映する「映画美学校映画祭」など多様なバックアップシステムを用意しています。

使用機材リスト 2025.5.24現在

●撮影・照明機材 Sony PWX-Z190×2、Sony ILME-FX6V×1、Panasonic AU-EVA1×1、Canon EOS C100×2、Meike FF Prime Cine Lens MK-16mm T2.5/24mm T2.1/35mm T2.1/50mm T2.1/85mm T2.1/105mm T2.1/135mm T2.4、SIGMA High Speed Zoom Line 18-35mm T2.0/50-100mm T2.0、SIGMA 10-20mm F3.5 EX DC HSM×2、Canon EF 24-70mm F2.8L II USM×2、Canon EF 70-200mm F2.8L IS II×2、Samyang 14mm F2.8 IF ED UMC Aspherical×1、Sachtler VIDEO20 2×1、Sachtler VIDEO18S2×1、Sachtler VIDEO15SB×1、Manfrotto 509HD×2、BlackMagicDesign SmartView 4K×1、Atmos SHINOBI×2、Portkeys HS7T×2、Panasonic BT-LH910G×1、TV-Logic VFM-058W×1、Hollyland MARS 4K×1、Tilta FF-T03×1、Tilta Nucleus-M×1、Egripment マタドールドリー×1、直線レール 1.8m×4、直線レール 1.6m×1、Libec SWIFT JB JB50×1、ユニフォーカス ライティングキット AL-UK-10-3×2、NEP デジタルパネル付大型LEDライト LED-L1000REF-digi-VCT-V×2、Aputure NOVA P600c×1、Aputure ライトストーム LS C300d II×2、ライトストーム LS 60x×3、AL-MC4 灯セット×2

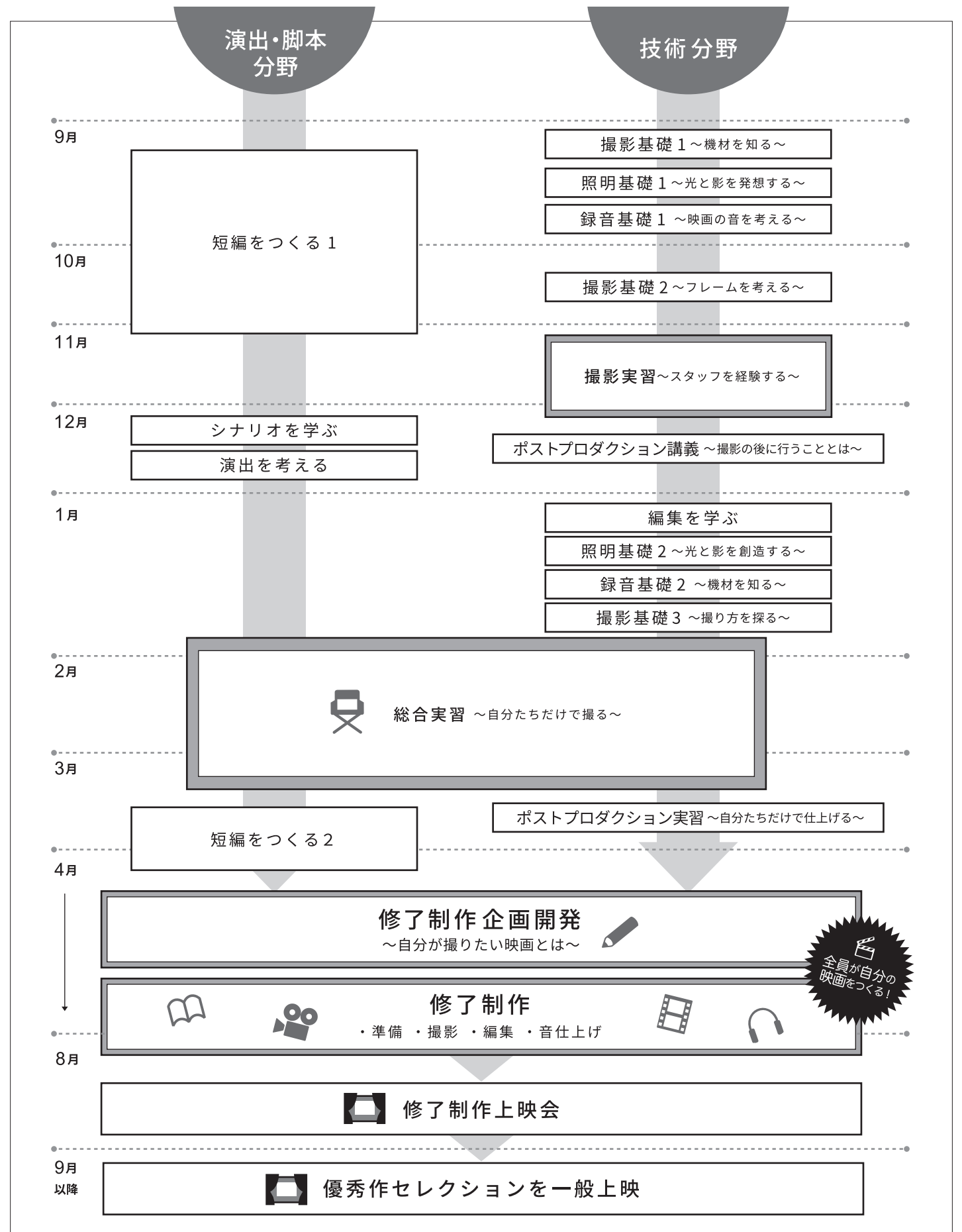
●録音機材 ZOOM F8n(レコーダー)×1、ZOOM H5(レコーダー)×7、RODE NTG-3(コンデンサマイク)×2、RODE NTG-2(コンデンサマイク)×5、SENNHEISER MKE600(コンデンサマイク)×2、SONY UWP-D21(ワイヤレスマイク)×2、KP9CCR KlassicPro シリーズ グラファイトファイバーブームポール×1、GITZO アルミ・ブーム×2、DAIWA アルミ・ブーム×5

●ポストプロダクション機材 BlackmagicDesign DaVinci Resolve Studio(統合型ポストプロダクションソフトウェア)×9、MacBook Pro (14-inch, M2 MAX, 2023)×1、MacBook Pro (13-inch, M2, 2022)×2、iMac(21-inch, 2017)×3、iMac(Retina 5K, 27-inch, 2017)×1、iMac(Retina 5K, 27-inch, Late 2015)×1、Mac Pro(Late 2013)×1、LG 21:9 UltraWide Monitor×1、ASUS ProArt Display PA32UCR-K×1

●試写設備・機材 試写室(定員70名)=35mm 映写機×2台、16mm 映写機×1台、8mm 映写機×2台、デジタルシネマサーバー(Dolby IMS3000)×1台、DLP Cinema プロジェクター(NEC Digital Cinema Projector NC603L)×1台、音響設備:MEYER SOUND デジタルドルビー

初等科カリキュラムの主な流れ

カリキュラム前半では、撮影、照明、録音、編集など映画制作に必要な技術を幅広く体験的に習得していく「技術分野」と、短編課題などでシナリオの書き方や演出を体験的に学ぶ「演出・脚本分野」の2つの分野を同時に学んでいきます。これら2つの分野の指導を第一線で活躍する講師陣から受け、時には受講生間で議論を行うことにより、演出力・脚本力・技術力が身につけられるようになっています。カリキュラムの後半では、希望者一人一人が、同じ初等科生とともに、15分の短編を制作します。完成作品は上映会を行い、優れた作品は劇場で上映会を行います。



<演出・脚本分野>

●短編をつくる1

まずはひとり1本ずつ、5分の短編映画を作ります。チームの仲間と一緒に協力しあいながら、映画を作る楽しさを体験しましょう。

●シナリオを学ぶ

映画を「家」にたとえれば、シナリオはその設計図です。「短編をつくる」の経験とアドバイスをふまえ、シナリオの作り方を学びます。

●演出を考える

シナリオという文字で書かれた2次元の設計図を、3次元の「家」として立体化するのが演出です。脚本をどのように読み込み、どのように演出するのか、その考察と実践を深めます。

●総合実習

与えられた課題脚本を班に分かれて映画化します。そもそも映画制作は複数のキャスト・スタッフが持つさまざまな技術を、準備、撮影、仕上げの場で持ち寄り、それらを総合的にまとめていく作業です。監督一人が作るものではありません。本格的な共同作業によって、映画作りの現場を体験します。

●短編をつくる2

総合実習で得た知識と経験を、今度は自分の映画にフィードバックします。自分の作る映画の面白さを、どんどん磨いていきましょう。

●修了制作

9月から半年間で学んだ集大成として、ひとり1本、15分の映画を制作します。それまでに学んできた演出・シナリオ・技術の知識と経験を総動員する実践の場です。完成した作品は8月末に完成講評を行い、その中から選ばれた優秀な作品は、劇場にて上映を行います。

<その他>

●美術論・サウンドデザイン（映画音楽を中心とした）・映画表現論 など

第一線で活躍するプロによる「美術論」「映画のサウンドデザイン（映画音楽を中心とした）」「映画表現論」などの映画術を学びます。

<技術分野>

●撮影基礎1・2・3～機材を知る・フレームを考える・撮り方を探る～

カメラの基礎的な機能を知り、カメラのフレーム（枠）の中と外を考える事で、何ができるのかを学びます。また自分で「ねらいを持って」撮るために、いろいろな撮り方を探ります。

●照明基礎1・2～光と影を発想する・光と影を創造する～

「撮影」とは、撮影対象に「光」が当たり光がカメラに反射することで映し出されます。「光」と「影」から映画を考えてみましょう。

●録音基礎1・2～映画の音を考える・機材を知る～

映画の重要な要素である音。基礎1・2では、映画の「音」を意識すること、そして、実習に向けての機材操作を学びます。

●撮影実習～スタッフを経験する～

撮影・照明・録音の基礎をふまえ、10人程度の班で撮影実習を行います。シーンごとにスタッフが移り変わる事で一通りのスタッフワークを経験します。各班にはアシスタントがつきます。

●編集を学ぶ

シナリオという設計図を演出で立体化・撮影で映像化した後は、編集という作業で映画を再構築します。この講義では編集の基本的な考え方を学びます。

●ポストプロダクション講義&実習

ポストプロダクションとは映画を撮影した後の作業のことです。編集から音の仕上げまでポストプロダクションの各工程を学んだ後は、撮影した素材を使い自分たちで実際に仕上げていきます。

映画美学校フィクション・コース 講師プロフィール

□ 演出・脚本講師

※初等科では3名の講師が演出・脚本分野の講義を担当し、直接指導します。

● 池田千尋 Ikeda Chihiro

1980年生まれ。映画監督、脚本家。高校在学時から自主映画制作を始める。早稲田大学第一文学部卒業。映画美学校修了制作作品である『人コロシの穴』が2003年カンヌ国際映画祭・シネフォンダシオン部門に正式出品される。助監督として幾つかの現場を経た後、東京藝術大学大学院映像研究科を2007年修了。劇場公開作品に『東南角部屋二階の女』(08)、『先輩と彼女』(15)、『スタートアップ・ガールズ』(19)、『君は放課後インソムニア』(23)、『九龍ジュネリックロマンス』(25)など。ドラマに『プリンセスメゾン』(16)、『大豆田とわ子と三人の元夫』(21)、『初恋、ざらり』(23)、『先生さようなら』(24)、『40までにしたい10のこと』(25)など。脚本家として、黒沢清監督『クリーピー〜偽りの隣人』(16)、青山真治監督『空に住む』(20)などがある。

● 大工原正樹 Daikuhara Masaki

1962年生まれ。大学時代から8ミリで自主映画を作り始める。その後、廣木隆一、鎮西尚一、村川透、市川準。村上修、石川均らの助監督を務めた後、89年映画『六本木隼嬢クラブ』でデビュー。以降の主な監督作に『もう・ぎりぎり』(91)、『未亡人誘惑下宿』(95)、『のぞき屋稼業 恥辱の盗撮』『同・夢犯遊戯』(96)、『風俗の穴場』(97)、『美人図捜査官』(97)、『痴漢白書8』(98)、『真・女神転生デビルサマナー』(TV／00)、『七瀬ふたたび』(TV／00)、『赤猫』(04)、『ミニチカ』(TV・06)、『姉ちゃん、ホトホトさまの蟲を使う』(10)、『純情 No.1』(11)、『おとしもの』(11)、『破戒くん』(12)、『恋の季節』(13)、『坂本君は見た目だけが真面目』(14)、『新しい人』(15)、『冥婚 love』(16)、『ファンタスティック ライムズ!』(17)、『やす焦がし』(17)、『純情 No.2』(18)、『検見川奇襲作戦』(19)、『洋子の浮気、カナの失敗』(20)、『苦い記憶』(21)、『裸の監督』(22)、『マーシャの黒』(23)などがある。

● 高橋洋 Takahashi Hiroshi

1959年生まれ。早大シネマ研究会で『夜は千の眼を持つ』など8ミリ作品を発表。90年に森崎東監督のテレビ作品『離婚・恐婚・連婚』で脚本家デビュー。主な脚本作品に、中田秀夫監督『女優霊』(95)、『リング』(98)、『リング 2』(99)、北川篤也監督『インフェルノ蹂躞』(97)、黒沢清監督『復讐 運命の訪問者』(96)『蛇の道』(98)『予兆 侵略する散歩者』(17)、佐々木浩久監督『発狂する唇』(99)『血を吸う宇宙』(01)、鶴田法男監督『リング0 パースデイ』(00)『おろち』(08)、三宅唱監督『Netflix オリジナルシリーズ 呪怨:呪いの家』(20)がある。近年は『恐怖』(10)『旧支配者のキャロル』(11)『霊的ポリシェヴィキ』(17)『ザ・ミソジニー』(22)など監督作が続く。フィクション・コース生とのコラボ作品『うそつきジャンヌ・ダルク』(21)『同志アナスタシア』(22)『女の決闘』(23)『白昼鬼語』(24)がオンライン公開中。著書に『映画の魔』(青土社)、稲生平太郎との共著『映画の生体解剖』(洋泉社)、脚本集『地獄は実在する』(幻戯書房)がある。

● 西山洋市 Nishiyama Yoichi

「おろし金に白い指」(91)『ホームビデオの秘かな愉しみ』(93)など実験的深夜ドラマの演出から出発。「ぬるぬる爛爛」「ぬるぬる爛爛の逆襲」(92)は96年に劇場用映画『ぬるぬる爛爛』としてリメイク。その他の監督作品に『痴漢白書劇場版II』(97)『完全なる飼育愛の40日』(01)『稲妻ルーシー』(04)『運命人間』(04)『グロゾカ』(05)など。共同脚本作品に黒沢清監督『蜘蛛の瞳』(98)塩田明彦監督『月光の囁き』(99)。一方、『桶屋』(00)『INAZUMA 稲妻』(05)『死なば諸共』(06)『kasanegafuti』(12)から新リモート映画の『FUE』(20)に至る『マゲをつけない時代劇』の試みで劇場版の新しい形を模索。近作に『瑠璃道花虹彩絵』(16)、『ネオ・ハムレット』(19)、『愛と嫉妬のパンデミック』(21／フィクション・コース第23期高等科生とのコラボレーション)。

● 万田邦敏 Manda Kunitoshi

1956年生まれ。96年、押井守総監修による実写 SF『宇宙貨物船レムナント6』で商業映画監督デビュー。2001年『UNLOVED』がカンヌ映画祭エキュメニク新人賞、レーン・ドール賞をダブル受賞。04年に『The Tunnel』(脚本＝井川耕一郎)がカンヌ映画祭監督週間招待された。他の監督作に『ありがと〜』(06)、『接吻』(07)、『面影』(10)、『シンクロナイザー』(16)、『愛のまなざしを』(21)。自主製作作品としてナンセンスコメディ『夫婦刑事』シリーズなど。映画美学校ではコラボレーション作品として、『夜の足跡』(00／シネマ GO ラウンドの一本)、『う・み・め』(04)、『×4』(08)、『イヌミチ』(13)、『波濤』(17)、『復讐の鐘を打て』(20)、『すすり泣く女』(22)、『珠姫の話』(24)を監督している。

□ 技術講師

● 山田達也 (撮影) Yamada Tatsuya

カメラマン瀬川順一に師事、撮影助手となる。ドキュメンタリー映画、企業VP、IMAXなどに参加。劇映画、CMの助手をへて石原プロモーションにてキャ

メラマン金宇満司に師事。近年は半野喜弘監督『雨にゆれる女』(16)、万田邦敏監督『シンクロナイザー』(17)『愛のまなざしを』(21)、熊切和嘉監督WOWOW 連続ドラマW『60 誤判対策室』(18)、佐向大監督『教師師』(18)、古澤健監督『たわなな気持ち』(19)『キラー・テナント』(20) テレビ東京連続ドラマ『お茶にごす』(21)、さかはらあつし監督『AGANAI 地下鉄サリン事件と私』(21)、金子雅和監督『水虎』(22)『光る川』(24)などを担当。映画美学校高等科コラボレーション作品としては篠崎誠監督『あれから』(12／東京国際映画祭出品)、万田邦敏監督『イヌミチ』(13／ゆうばり国際ファンタスティック映画祭出品)、『復讐の鐘を打て』(20)、高橋洋監督『旧支配者のキャロル』(12)『霊的ポリシェヴィキ』(17)。講師と高等科生との共同監督作品『すすり泣く女』(22)、『女の決闘』(23)、『珠姫の話』(24)、『火の果て』(25)を担当。

● 臼井勝 (録音) Usui Masaru

1968年岐阜市生まれ。グラフィックデザイナーとして勤めるのと並行して、上映イベントのプロデュースに参加したのち、上京。制作部、照明助手などを経て、村上龍監督『TOPAZ<トパーズ>』で録音技師となる。近年の担当作として、映画では、早川千絵監督『PLAN75』(22／録音)、小中和哉監督『Single8』(23／録音・整音・効果・ミックス)、ビエールフォルディス・深田晃司監督『めくらやなぎと眠る女(日本語吹き替え版)』(24／録音・整音・音響監督)、井上淳一監督『青春ジャック』(24／録音・整音・ミックス)、立川晋輔監督『くすぶりの狂騒曲』(24／録音・整音・ミックス)、桜井亜美監督『パーフェクト・シェアハウス』(25／録音・整音・効果・ミックス)、足立紳監督『GoodLuck』(25／録音・整音・効果・ミックス)、米倉強太監督『キャンドルスティック』(録音)、石田えり監督『私の見た世界』(25／録音・整音・効果・ミックス)など。TVドラマでは「それでも俺は、妻としたい」「はきんちゃんといごっそう」「こんばんは、朝山家です。」などがある。また、映画美学校製作作品においては、受講生と講師のコラボレーション作品の録音・整音を数多く手掛けている。

● 磯見俊裕 (美術) Isomi Toshihiro

1957年生まれ。様々な職業を経て、木に関するイベントを手掛けていた時に山本政志と出会い、同監督の『てなもんやコネクション』(90)に参加。青山真治監督『Helpless』(96)、石井聰互監督『ユメノ銀河』(97)などの作品で美術を担当。その後も、崔洋一監督『血と骨』(04)、是枝裕和監督『歩いてても歩いても』(08)、橋口亮輔監督『ぐるりのこと。』(08)、アミール・ナデリ監督『CUT』(11)、アッバス・キアロスタミ監督『ライク・サムワン・イン・ラブ』(12)、TVドラマ「あまちゃん」(13/美術アドバイザー)、鄭義信監督『焼肉ドラゴン』(18)、土井裕泰監督『罪の声』(20)、手塚真監督『ばるばら』(20)、瀬々敬久監督『とんび』(22)など枚挙に暇が無い。また諏訪敦彦監督のデビュー作『2／デュオ』(97)をはじめ、『TANPEN 短編』(01)、七里圭監督『のんきな姉さん』(02)、池田千尋監督『東南角部屋二階の女』(08)などではプロデューサーを務めている。

● 岸野雄一 (音楽) Kishino Yuichi

1963年生まれ。音楽家／DJ／著述家等、多岐に渡る活動を包括する名称として“スタディスト”を名乗り、ポピュラーミュージック全般と映像に携わり活動を続け、常に革新的な『場』を創造している。東京藝術大学大学院映像研究科や美学校にて教鞭を執る。2013年、坂本龍一、浅田彰、小沼純一と共著「コモンズ・スコラ・映画音楽」編を上梓。2015年「正しい数の数え方」で第19回文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門大賞を受賞。塩田明彦監督『どこまでもいこう』、黒沢清監督『地獄の警備員』などの音楽&音楽プロデュースを多数手がける。

● 林和哉 (駿河台大学メディア情報学部教授 / 映像プロデューサー / ディレクター) Hayashi Kazuya

東宝や劇団四季などでミュージカル俳優を主軸に活動、その後映像制作へ。撮る側と撮られる側の心理の違いを明確に把握し、的確に指摘する演出で独自の世界観を表現した作品群を制作。映画『警泥』(08)が上海国際映画祭アジア新人賞入選、ニューポートビーチフィルムフェスティバル正式招待など国際的な評価を得ている。SONY、Panasonic、CANON、NIKONのプロ映像機器を使用した制作での経験を踏まえ、各メーカーからの依頼により各種セミナーの企画・講師を担当。現在も、Premiere Pro CC、DaVinci Resolve、FinalcutPro、撮影・演技ワークショップなどのセミナーを企画実施。ドラマ、4K映画などのディレクション、プロデュース、撮影、オフライン・オンライン編集と、入り口から出口まですべてのポジションを守備範囲としている。また多数の映像業界月刊誌の記事を執筆。現在はUnity Technologies Japanにて、Unityで映像分野のクリエイターをアシストするためのツールやワークフロー開発のディレクションに注力している。その他ProNewsにて、「デジタルシネマの歩き方」を連載中。CG-ARTS協会講師。DaVinci Resolve公認トレーナー。日本ポストプロダクション協会アワード審査委員。

テオ・アンゲロプロス（ギリシャ／映画監督） Theo Angelopoulos　Greece／Director	オタル・イオセリアーニ（グルジア／映画作家） Otar Iosseliani　Georgia／ Director
オリヴィエ・アサイヤス（フランス／映画監督） Olivier Assayas　France／Director	イザベル・ユベール（フランス／俳優） Isabelle Huppert　France／Actress
ドミニク・オーヴレイ（フランス／映画編集者） Dominique Auvray　France／Editor	ジャ・ジャンクー（中国／映画監督） Jia Zhang Ke　China／Director
トーマス・アルスラン（ドイツ／映画監督） Thomas Arslan　Germany／Director	ジョン・ジョスト（アメリカ／映画監督） Jon Jost　USA／Director
エミリ・アテフ（ドイツ／映画監督） Emily Atef　Germany／ Director	アキ・カウリスマキ（フィンランド／映画監督） Aki Kaurismaki　Finland／Director
マルコ・ベロッキオ（イタリア／映画監督） Marco Bellocchio　Italy／Director	アッバス・キアロスタミ（イラン／映画監督） Abbas Kiarostami　Iran／Director
セバスチャン・ベベデール（フランス／映画監督） Sebastien Betheder　France／Director	ウド・キア（ドイツ及びアメリカ／映画俳優） Udo Kier　Germany・USA／Actor
パオロ・ベンヴェヌーティ（イタリア／映画監督） Paolo Benvenuti　Italy／Director	キム・ドンウォン（韓国／映画監督） Kim Dong-won　Korea／Director
アラン・ベルガラ（フランス／映画批評家・映画監督／パリ第三大学教授） Alain Bergala　France／Film Critic, Director	ジャン＝マルク・ランヌ（フランス／映画批評家／『レザンロキュティール』編集長） Jean-Marc Lalanne　France／Film Critic
ハルトムート・ビットムスキー（ドイツ／映画監督／カリフォルニア芸術大学教授） Hartmut Bitomsky　Germany／Director	ジャン＝ピエール・リモザン（フランス／映画監督） Jean-Pierre Limosin　France／Director
シルヴェット・ボドロ（フランス／スクリプター／フランス国立映像音響学院FEMIS教授） Sylvette Baudrot　France・USA／script supervisor	フランソワーズ・ルブラン（フランス／映画俳優） Françoise Lebrun　France／Actress
パスカール・ボニゼール（フランス／映画監督・脚本家／FEMIS教授） Pascal Bonitzer France／Writer,Director	ラウラ・ルケッティ（イタリア／映画監督） Françoise Lebrun　Italy／Director
レオス・カラックス（フランス／映画監督） Leos Carax　France／Director	モフセン・マフマルバフ（フランス／映画監督） Mohsen Makhmalbaf　France／Director
ジャン＝クロード・カリエール（フランス／脚本家／フランス国立映像音響学院FEMIS教授） Jean-Claude Carrière　France／Writer	ダミアン・マニヴェル（フランス／映画監督） Damian Manivel　France／Director
ルー・カステル（コロンビア／俳優） Lou Castel　Columbia／Director	ジル・マルシャン（フランス／映画監督・脚本家） Gilles Marchand　France／Director, Writer
ジュリー・コーマン（アメリカ／映画プロデューサー） Julie Corman　USA／Producer	アナ・モレイラ（ポルトガル／俳優） Ana Moreira　Portugal／Actress
ペドロ・コスタ（ポルトガル／映画監督） Pedro Costa　Portugal／Director	フレディ・ムーラー（スイス／映画監督） Fredi M. Murer　Switzerland／Director
コスタ＝ガヴラス（フランス／映画監督） Constantin Costa-Gavras　France／Director	アミール・ナデリ（イラン／映画監督） Amir Naderi　Iran／Director
アレックス・コックス（イギリス／映画監督） Alex Cox　UK／ Director	ビュル・オジエ（フランス／映画俳優） Bulle Ogier　France／Actress
カルロト・コッタ(ポルトガル／映画俳優) Carloto Cotta　Portugal／Actor	ギョーム・ニクルー（フランス／映画監督） Guillaume Nicloux　France／Director
クレール・ドゥニ（フランス／映画監督） Claire Denis　France／Director	パク・チャヌク（韓国／映画監督） Park Chan-wook　South Korea／Director
アルノー・デプレシャン（フランス／映画監督） Arnaud Desplechin　France／Director	ドミニク・パイニーニ（フランス／映画批評家／シネマテーク・フランセーズ元館長） Dominique Paini　France／Film Critic
カトリーヌ・ドヌーヴ（フランス／俳優） Catherine Deneuve　France／Actress	メルヴィル・プポー（フランス／俳優） Melvil Poupaud　France／Actor
マティー・ドゥー（ラオス／映画監督） Mattie Do　Lao PDR／Director	ジョアン・ペドロ・ロドリゲス（ポルトガル／映画監督） João Pedro Rodrigues　Portugal／Director
ジャック・ドワイヨン（フランス／映画監督） Jacques Doillon　France／Director	マティアス・ピニエイロ（ポルトガル／映画監督） Matias Piñeiro　Argentina／Director
ジャン＝シャルル・フィトゥッシ（フランス／映画監督） Jean-Charles Fitoussi　France／Director	ネルソン・ペレイラ・ドス・サントス（ブラジル／映画監督） Nelson Pereira dos Santos　Brazil／Director
ジャン・ドゥーシェ（フランス／映画批評家・映画監督／パリ第三大学教授） Jean Douchet　France／Film Critic, Director	ロム・ロンブット（ベルギー／映画監督） Rom Rombt　Belgium／Dirctor
ブリュノ・デュモン（フランス／映画監督） Bruno DUMONT　France／Director	リュ・スンワン（韓国／映画監督・俳優） Ryoo Seung-wan　South Korea／Director,Actor
イルディコー・エニエディ（ハンガリー／映画監督） Ildikó Enyedi　Hungary／Director	ダニエル・シュミット（スイス／映画監督） Daniel Schmid　Switzerland／Director
ニコラ・エリオット（フランス／映画批評家／『カイエ・デュ・シネマ』ニューヨーク特派員） Nicolas Elliot　Hungary／Film Critic	イエジー・スコリモフスキ（ポーランド／映画監督） Jerzy Skolimowski　Poland／Director
ビクトル・エリセ（スペイン／映画監督） Victor Erice　Spain／Director	ジャン＝フィリップ・テセ（フランス／映画批評家／『カイエ・デュ・シネマ』副編集長） Jean-Philippe Tessé　France／Film Critic
フォン・イエン（中国／映画監督） Feng Yan.　China／Director	ツァイ・ミンリャン(台湾／映画監督) Tsai Ming-Liang　Taiwan／ Director
ソフィー・フィリエール（フランス／映画監督・脚本家） Sophie Fillières　France／Director, Writer	セルジュ・トゥビアナ（フランス／映画批評家／シネマテーク・フランセーズ館長） Serge Toubiana　France／Film Critic
ティエリー・フレモー（フランス／映画批評家・映画監督／カンヌ映画祭総代表） Thierry FRÉMAUX　France／Film Critic, Director	ポール・ヴァーホーヴェン（オランダ／映画監督） Paul Verhoeven　Netherlands／Director
ジャン＝ミシェル・フロドン（フランス／映画批評家／元「ル・モンド」紙映画担当責任者） Jean - Michel Frodon　France／Film Critic	ジョン・ウォーターズ（アメリカ／映画監督） John Waters　USA／Director
フィリップ・ガレル（フランス／映画監督） Philippe Garrel　France／Director	アンヌ・ヴィアゼムスキー（フランス／俳優） Anne Wiazemsky　France／Actor
トニー・ガトリフ（フランス／映画監督） Tony Gatlif　France／Director	ヴィム・ヴェンダース（ドイツ／映画監督） Wim Wenders　Germany／Director
アモス・ギタイ（イスラエル／映画監督） Amos Gitai　Israel／Director	フレデリック・ワイズマン（アメリカ／映画監督） Frederick Wiseman　USA／Director
アラン・ギロディ（フランス／映画監督） Alain Guiraudie　France／Director	

映画美学校フィクション・コース制作作品一覧

【初等科修了作品】

●第1期(1998年制作)

『怯える』	監督・脚本：古澤健 34min／16mm クレルモンフェラン国際短篇映画祭
『死臭のマリア』	監督・脚本：伊藤晋 27min／16mm
『はるのそら』	監督・脚本：松本知恵 38min／16mm
『鼻の穴』	監督・脚本：稲見一茂 30min／16mm オーバーハウゼン国際短篇映画祭

●第2期(1999年制作)

『集い』	監督・脚本：遠山智子 30min／16mm
『犬を撃つ』	監督・脚本：木村有理子 32min／16mm カンヌ映画祭シネフォンドーション部門
『黒アゲハ教授』	監督・脚本：福井廣子 30min／16mm エクサンプロヴァンス国際短篇映画祭
『よろこび』	監督・脚本：松村浩行 32min／16mm エクサンプロヴァンス国際短篇映画祭、 オーバーハウゼン国際短篇映画祭国際批評家連盟受賞

●第3期(2000年制作)

『夕陽』	監督・脚本：小泉恵美子 20min／16mm
『綱渡り』	監督・脚本：小出豊 33min／16mm
『赤い芝生』	監督・脚本：梅内美江子 38min／16mm
『APE』	監督・脚本：槌屋詩野 32min／16mm

●第4期(2001年制作)

『つもってゆく…』	監督：宮川和浩 36min／16mm
『ふくしゅう』	監督：金子裕昌 38min／16mm
『zero』	監督・脚本：鎌田優子 31min／16mm
『みち』	監督・脚本：佐々木紳 55min／16mm

●第5期(2002年制作)

『三姉妹日記』	監督・脚本：清水信貴 39min／16mm
『人コロシの穴』	監督・脚本：池田千尋 36min／16mm カンヌ映画祭シネフォンドーション部門
『カナ子』	監督・脚本：玉城陽子 36min／16mm
『月のある場所』	監督・脚本：杉田協士 43min／16mm
『とどまるか、なくなるか』	監督・脚本・編集：瀬田なつき 36min／DVCAM

●第6期(2003年制作)

『春雨ワンダフル』	監督・脚本：青山あゆみ 36min／16mm カンヌ映画祭シネフォンドーション部門
『海を探す』	監督・脚本：小嶋洋平 35min／16mm
『如雨露』	監督・脚本：吉井亜矢子 31min／16mm オーバーハウゼン国際短篇映画祭
『緑色のカーテン』	監督・脚本：隅達昭 35min／16mm

●第7期(2004年制作)

『三人打ち』	監督・脚本・編集：金銅浩 32min／16mm
『あわぶくたった』	監督・脚本・編集：渋谷美由貴 31min／16mm
『モリムラ』	監督・脚本・編集：村山圭吾 33min／16mm
『五尺三寸』	監督・脚本・編集：別府裕美子 36min／16mm

●第8期(2005年制作)

『バオバブのけじめ』	監督・脚本・編集：松浦博直 34min／16mm
『out of our tree』	監督・脚本・編集：中矢名男人 31min／16mm
『水の睡り』	監督・脚本・編集：棚兼拓磨 30min／16mm
『底無』	監督・脚本・編集：小嶋健作 31min／16mm

●第9期(2006年制作)

『迷蛾の灯』	監督・脚本：長谷部大輔 16min／16mm→DV
『視界肉体旋律暗号』	監督・脚本：大橋礼子 16min／16mm→DV
『せくつ』	監督・脚本：竹内洋介 16min／16mm→DV
『ざわめき』	監督・脚本：間野勇人 16min／16mm→DV
『復讐』	監督・脚本：吉川慎太郎 16min／16mm→DV
『船乗り』	監督・脚本：中井香葉 16min／16mm→DV

●第10期(2007年制作)

『そこへ行く』	監督・脚本：福井早野香 16min／16mm→DV
『交わる』	監督・脚本：古田円香 16min／16mm→DV
『キミマニア』	監督・脚本：原貴子 18min／16mm→DV
『箱ぐずし』	監督・脚本：今岡陽子 18min／16mm→DV
『光の中で』	監督・脚本：梶原将一 18min／16mm→DV
『いつか終わるということ』	監督・脚本：平澤博 20min／16mm→DV
『臨月』	監督・脚本：難波阿丹 15min／16mm→DV

●第11期(2008年制作)

『さらばゲームセンター』	監督・脚本：谷脇邦彦 17min／16mm→DV
『冥土星』	監督・脚本：原太一 18min／16mm→DV
『ラクシュ』	監督・脚本：清水裕紀子 16min／16mm→DV
『迷子ではない、冒険しているんだ。』	監督・脚本：花房菜々子 17min／16mm→DV
『楽園』	監督・脚本：田村恵 17min／16mm→DV
『産道』	監督・脚本：伊藤まき 17min／DV／助成金作品
『牛乳王子』	監督・脚本：内藤瑛亮 15min／16mm→DV ワールドワイド短編映画祭、Philly Film & Music Festival 2010、 日韓ムービーアワード2010、ニッポンコネクション2010、 スラムダンス映画祭2010、「Festival Court Metrange」

●第12期(2009年制作)

『帰省』	監督・脚本：青柳一成 16min／16mm→DV
『oldmaid』	監督・脚本：小森はるか 13min／16mm→DV

『通り雨』	監督・脚本：榊祐人 16min／16mm→DV
『矢』	監督・脚本：村上誠 16min／16mm→DV
『蠅の棲む家』	監督・脚本：市川敦史 16min／16mm→DV
『綱渡り師たち』	監督・脚本：坂上和孝 16min／16mm→DV／助成金作品

●第13期(2010年制作)

『わたしの赤ちゃん』	監督・脚本：磯谷渚 16min／16mm→DV
『恐竜いらない』	監督：本田雅英 16min／16mm→DV
『どこかに落としてきた』	監督・脚本：深津望 14min／16mm→DV
『ミントと山ごもり』	監督・脚本：猪原美代子 16min／16mm→DV
『正当防衛』	監督・脚本：伊野紗紀 16min／16mm→DV
『くちびるコミュニケーション』	監督・脚本：石川貴雄 16min／HDV／助成金作品

●第14期(2011年制作)

『LESSON』	監督・脚本：久保裕章 15min／16mm→DV
『いでよ、空』	監督・脚本：高木栄衣子 16min／16mm→DV
『おもちゃを解放する』	監督・脚本：酒井善三 16min／16mm→DV
『カーマイン』	監督・脚本：森京子 16min／HD／助成金作品

●第15期(2012年制作)

『rumble temple』	監督・脚本：公文名智 15min／16mm→DV
『あくろすざ』	監督・脚本：中村太紀 16min／16mm→DV
『春生〈ハルオ〉』	監督・脚本：若栗有吾 16min／16mm→DV
『東京196km』	監督・脚本：高橋大佑 16min／16mm→DV

●第16期(2013年制作)

『ぼっち』	監督・脚本：登り山智志 16min／HD
『さよならマチコ』	監督・脚本：加藤正顕 15min／HD
『りんこと、りんこのひみつ』	監督・脚本：倉田春那 16min／HD
『泥人』	監督・脚本：上野皓司 16min／HD

●第17期(2014年制作)

『ブロッケン妖怪』	監督・脚本：山口佳奈 16min／HD
『たちんぼ』	監督・脚本：横山翔一 16min／HD ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2016 インターナショナル・ショートフィルム・コンペティション部門
『姉と弟』	監督・脚本：中村佳寛 16min／HD

※第18期以降の初等科は希望者全員が監督する修了制作に変更

【高等科作品】

●第1期実習作品(1999年制作)

『薄羽の蝶』	監督・脚本：原瀬涼子 23min／16mm
『意外と死まない』	監督・脚本：大九明子 42min／16mm

●第2期準スカラシップ作品(2002年制作)

『亀の歯』	監督・脚本：遠山智子 35min／16mm
-------	-----------------------

●第3期実習作品(2001年制作)

『蘇州の猫』	監督・脚本：内田雅章 33min／16mm 2003年カンヌ映画祭シネフォンドーション部門
『明るい部屋』	監督・脚本：合田典彦 46min／16mm

●第3期スカラシップ作品(2003年)

『お蛇ヶ池団地』	監督・脚本：堀内浩一 105min／DVCAM
『ENCLOSURE』	監督・脚本：中井友昭 78min／DVCAM

●第4期スカラシップ作品(2004年制作)

『鉄の裁き』	監督・脚本：杉原利明 72min／DV
『風の残響』	監督・脚本：幸修司 58min／DVCAM

●第5期作品(2004年制作)

『爆撃機の眼』	監督・脚本：八坂俊行 60min／DVCAM
『世界は彼女のためにある』	監督・脚本：保坂大輔 100min／DVCAM ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2005 オフィシアター部門審査員特別賞、 ニッポン・コネクション2016

●第6期作品(2005年制作)

『女たち』	監督・脚本：佐藤央 50min／DVCAM
『ちえみちゃんとこっくんぱっちょ』	監督・脚本：横浜聡子 52min／DVCAM ニッポンコネクション、ソウル国際女性映画祭

●第7期作品(2005年制作)

『すみれ人形』	監督・脚本：金子雅和 58min／DVCAM 第13回ハンブルグ日本映画祭
---------	--

●第8期作品(2007年制作)

『sad girl』	監督・脚本：中矢名男人 47min／DVCAM
『ハートに火をつけて』	監督・脚本：朝倉加葉子 30min／DVCAM
『目のまえ』	監督・脚本：川村清人 80min／HDV／助成金作品

●第9期作品(2008年制作)

『魔眼』	監督・脚本：伊藤淳 24min／16mm
『大拳銃』	監督・脚本：大畑創 31min／16mm ゆうばりファンタスティック映画祭2009オフィシアター部門審査員特別賞

●第10期作品

『見知らぬ恋人』(2009年制作)	監督・脚本：川邊崇広 38min／16mm
『バメラ・ジオキシン』(2011年制作)	監督：平澤博／蓼沼風太／麻生忠／ 海田晃弘／宮崎大祐 25min／16mm

●第11期作品

『乱心』(2011年制作) 監督: 富永圭祐 55min/16mm
ニッポン・コネクション2012
『スケアー・モンスターズ』(2012年制作) 監督: 谷脇邦彦 48min/16mm→HD
『先生を流産させる会』(2011年制作) 監督: 内藤瑛亮 62min/HDV/助成金作品
ニッポン・コネクション2012

●第12期作品 (2012年制作)

『おこもりがえし』 監督・脚本: 小堂真宏 34min/16mm→HD
『影を追う人』 監督・脚本: 佐藤純子 28min/16mm→HD

●第13期作品 (2012年制作)

『愛の異端』 監督・脚本: 小岩貴寛 35min/16mm→HD
『反駁』 監督・脚本: 伊之紗紀 50min/16mm→DV
『天使の欲望』 監督・脚本: 磯谷渚 40min/HD/助成金作品
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2014
オフシアター・コンペティション部門、
ニッポン・コネクション2014、レインダンス国際映画祭2014

●第14期作品 (2013年制作)

『ヴェルニ』 監督・脚本: 丸山夏奈 45min/HD

●第15期作品 (2015年制作)

『なんのすべもなく』 監督: 若栗有吾、脚本: 加藤高浩 48min/HD

●第17期作品 (2017年制作)

『はめられて Road to Love』 監督・脚本: 横山翔一 60min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2017
オフシアター・コンペティション部門北海道知事賞受賞

●第18期作品 (2017年制作)

『ギャルソヌ 2つの性を持つ女』 監督・脚本: 穂山菜由 30min/HD
『フーコの婚活』 監督・脚本: 宮城伸子 30min/HD

●第19期作品 (2018年制作)

『三崎家の設計』 監督・脚本: 藤本英志朗 28min/HD
『養子縁組殺人事件』 監督・脚本: 吉岡資 38min/HD

●第20期作品 (2019年制作)

『泥』 監督・脚本: 成瀬都香 34min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2020フォービデオゾーン部門、
ソウル国際プライド映画祭
『恋愛準々決勝戦』 監督・脚本: 小濱匠 50min/HD/助成金作品

●第21期作品 (2024年制作)

『恋わずらい』 監督・脚本: 小嶋貴子 39min/HD/助成金作品

●第22期作品

『闇の経絡』(2023年制作) 監督・脚本: 及川礼音 27min/HD
『トーチ』(2024年制作) 監督・脚本: 北原七海 27min/HD/助成金作品

●第23期作品 (2024年制作)

『小林葵は行方不明』 監督・脚本: 横山裕香 28min/HD
『となりのめぐりちゃん』 監督・脚本: 根岸摩耶 23min/HD

●第24期作品 (2024年制作)

『松坂さん』 監督・脚本: 畔柳太陽 40min/DCP
『はなのこと』 監督・脚本: 田之上裕美 42min/DCP/助成金作品

●第25期作品 (2025年制作)

『赤い脚』 監督・脚本: 山中隆史 32min/DCP
『よそ者の会』 監督・脚本: 西崎羽美 45min/DCP/助成金作品

【高等科コラボレーション作品】

●第1期(1999年制作)

『大いなる幻影』 監督・脚本: 黒沢清 95min/35mm
ヴェネツィア国際映画祭、トロント映画祭、
フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ
『どこまでもいこう』 監督・脚本: 塩田明彦 75min/35mm
毎日映画コンクール スポニチグランプリ新人賞、
イラン・イスファハン児童・青少年国際映画祭審査員名誉賞、
ロカルノ映画祭、ロッテルダム映画祭、
ナント三大陸映画祭審査員特別賞、他

●第2期 (2000年制作)

『夜の足跡』 監督: 万田邦敏 38min/16mm→BETACAM
ARTE放映作品
『桶屋』 監督・脚本: 西山洋市 28min/16mm→BETACAM
『月へ行く』 監督: 植岡喜晴 35min/16mm→BETACAM
『寝耳に水』 監督・脚本: 井川耕一郎 32min/16mm→BETACAM
TOKYO FILMeX2000上映作品(上記4作品)

●第4期 (2002年制作)

『みつかるまで』 監督: 常本琢昭 45min/16mm

●第5期 (2003年制作)

『My Sweet Planet』 監督: 瀬々敬久 19min/16mm

●第6期 (2004年制作)

『赤猫』 監督: 大工原正樹 42min/DVCAM
『う・み・め』 監督: 万田邦敏 28min/DVCAM

●第7期 (2005年制作)

『INAZUMA 稲妻』 監督: 西山洋市 30min/DVCAM

●第8期 (2006年制作)

『殺しのはらわた』 監督: 篠崎誠 30min/DVCAM
『西みがき』 監督: 井川耕一郎 53min/DVCAM

●第9期 (2007年制作)

『先生、夢まちがえた』 監督: 古澤健 40min/Hi-8→DVCAM
『狂気の海』 監督・脚本: 高橋洋 34min/DVCAM

●第10期

『×(かける)4』(2008年制作) 監督: 万田邦敏 40min/DVCAM
『孤独な惑星』(2010年制作) 監督: 筒井武文 94min/16mm→35mm

●第11期 (2010年制作)

『土竜の祭』 監督: 井土紀州 51min/HDV ニッポン・コネクション2011上映作品
『姉ちゃん、ホトホトさまの蠱を使う』 監督: 大工原正樹 49min/HDV
ニッポン・コネクション2012

●第12期 (2011年制作)

『kasanegafuti』 監督: 西山洋市 27min/HDV

●第13期 (2011年制作)

『love machine』 監督: 古澤健 27min/HDV
『旧支配者のキャロル』 監督: 高橋洋 47min/HDV

●第14期 (2012年制作)

『あれから』 監督: 篠崎誠 63min/HD
第25回 東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門

●第15期 (2013年制作)

『イヌミチ』 監督: 万田邦敏 71min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2014フォアキャスト部門

●第17期 (2015年制作)

『お母さん、ありがとう』 監督: 保坂大輔 39min/HD
ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2016
フォアキャスト部門、ニッポン・コネクション2016

●第18期 (2016年制作)

『瑠璃道花虹彩絵』 監督: 西山洋市 40min/HD

●第19期 (2017年制作)

『霊的ポリシェヴィギ』 監督: 高橋洋 72min/HD
チョルラ映画祭、ニッポン・コネクション2017、
プチョン国際ファンタスティック映画祭2018

●第20期 (2018年制作)

『波瀾』 監督: 万田邦敏 30min/HD

●第21期 (2019年制作)

『ネオナハムレット』 監督: 西山洋市 34min/HD

●第22期 (2020年制作)

『復讐の鐘を打て』 監督: 万田邦敏 27min/HD

●第23期 (2021年制作)

『うそつきジャンヌ・ダルク』 監督・監修: 高橋洋 監督: 福井秀策、倉谷真由
47min/HD
『愛と嫉妬のパンデミック』 総監督: 西山洋市 監督: 高野一興、中馬康輔、中村健佑
間合建介、宮武邦雄 33min/HD

●第24期 (2022年制作)

『すすり泣く女』 監修: 万田邦敏 監督: 色川翔太、田之上裕美、土田百恵、
万田邦敏 29min/HD

●第25期 (2023年制作)

『女の決闘』 監修: 高橋洋 監督: 山中隆史、大工原正樹、鴨林諄宜、
高橋洋 46min/HD

●第26期 (2024年制作)

『珠姫の話』 総監修: 万田邦敏 監督: 森七美子、山田香、渋谷龍、万田邦敏
25min/HD

【研究科、その他作品】

『すでに老いた彼女のすべてについては語らぬために』(2001年制作)
監督: 青山真治 51min/DVCAM
『AA』(2005年制作) 監督: 青山真治 443min/Digital BETACAM
『ルック・オブ・ラブ』(2005年制作) 監督・脚本: 植岡喜晴 108min/8mm→DVCAM
香港映画祭、全州映画祭、ニッポンコネクション
『4時45分』(2014年制作) 監督: 三宅唱 29min/HD

【映画美学学校映画祭スカラシップ作品】

『国道20号線』(2007年制作) 監督・脚本: 富田克也 77min/16mm→DVCAM
『TOCHKA』(2008年制作) 監督・脚本: 松村浩行 93min/DVCAM
第22回 東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門

映画美学校 沿革 1997年～2025年

1997年	
10月	アテネ・フランセ文化センターとユーロスペースの共同プロジェクトとしてアテネ・フランセにて「映画技術美学講座」初等科（現フィクション・コース初等科）開講（主任講師：黒沢清）。
1998年	
10月	名称を「映画美学校」と改め教室を中央区京橋の片倉ビルに移転。
11月	字幕講座（現映像翻訳講座）を開講。
1999年	
2月	フィクション・コース第1期初等科修了作品、古澤健監督『怯える』クレルモンフェラン国際短編映画祭（仏）コンペティション部門に正式招待。
3月	ドキュメンタリー・ワークショップ（現ドキュメンタリー・コース）を開講（主任講師：佐藤真）。
3月～7月	高等科カリキュラムの一環として、塩田明彦監督『どこまでもいこう』と黒沢清監督『大いなる幻影』の2本の長篇作品を製作。
4月	フィクション・コース第1期初等科修了作品、稲見一茂監督『鼻の穴』がオーバーハウゼン国際短編映画祭（ドイツ）コンペティション部門に正式招待。
8月	映画撮影夏期集中講座開講。以降毎年夏に開講。
2000年	
3月	『どこまでもいこう』が文化庁優秀映画賞大賞に選ばれる。
4月	映画美学校が東京都より特定非営利活動法人（NPO）に認証される。
5月	フィクション・コース第2期初等科修了作品、木村有理子監督『犬を撃つ』がカンヌ映画祭シネフォンダシオン部門に正式招待。
5月～6月	松岡譲司監督『アカシアの道』の製作プロダクション隣、修了生、高等科受講生の一部がスタッフとして参加。
8月	フィクション・コース第2期初等科修了作品、松村浩行監督『よろこび』、フィクション・コース第2期初等科修了作品、福井廣子監督『黒アゲハ教授』がエクサンプロバンス映画祭（フランス）に正式招待。
12月	佐藤真監督『SELF AND OTHERS』の製作に協力。 ドキュメンタリーワークショップ作品、飯岡幸子監督『オブディプス王／クナウカ』がアートドキュメンタリー映画祭で上映される。 フィクション・コース第2期高等科コラボレーション作品、万田邦敏監督『夜の足跡』、井川耕一郎監督『寝耳に水』、西山洋市監督『桶屋』、植岡義晴監督『月へ行く』が TOKYO FILMeX2000 で『日本映画考』と題して上映される
2001年	
3月	フィクション・コース第1期高等科で最優秀脚本に選ばれた、清野弥生『害虫』を塩田明彦監督が映画化（製作：日活他）。
4月	『よろこび』がオーバーハウゼン国際短編映画祭に正式招待され、国際批評家連盟賞を受賞。 片倉ビル地下1階に第2試写室他などの新施設を増設。
8月	短期講座「夏期音楽美学講座」を開講（コーディネーター：岸野雄一）。
11月	群馬県で開催された第16回国民文化祭において、高崎市が主催したシンポジウム『21世紀と映画表現の可能性』に協力。同シンポジウムための映像作品（黒沢清、阪本順治、青山真治らが監督）の製作に協力。
12月	研究科で講評を受け自主制作された、加瀬澤充監督『あおぞら』が AZ コンテストで準グランプリを受賞。
2002年	
5月	フィクション・コース第3期高等科実習作品、内田雅章監督『蘇州の猫』がカンヌ映画祭シネフォンダシオン部門に正式出品される。
6月	万田邦敏監督『夜の足跡』が ARTE（フランス・ドイツ放送）で放映。
7月	フィクション・コース第4期初等科修了作品、佐々木紳監督『みち』が PFF に入選、技術賞（IMAGICA 賞）受賞。
8月	『蘇州の猫』、フィクション・コース第3期高等科実習作品、合田典彦監督『明るい部屋』が京都学生映画祭で準グランプリ受賞。
9月	「映画美学校映画祭2002」を開催。以降毎年開催。 ドキュメンタリー・コース初等科、田村一郎監督『粘土ができるまで』が AZ コンテストで準グランプリ受賞。
2003年	
5月	フィクション・コース第5期初等科修了作品、池田千尋監督『人コロシの穴』がカンヌ映画祭シネフォンダシオン部門に正式招待。
7月	音楽美学講座を通年の講座として開講。

9月	F.E.M.I.S.（フェミス／フランス国立映像映画音響学院）との共催による「夏期特別クラス」開講。
10月	山形国際ドキュメンタリー映画祭の「学校プログラム」に参加。 「映画上映専門家養成講座」が（財）国際文化交流推進協会（エース・ジャパン）との共催で、文化庁の支援を受け開講。
2004年	
3月	「ペドロ・コスタ監督 短期集中講座」開講。
4月～12月	ユーロスペース製作「映画番長」シリーズで、フィクション・コース修了生の安里麻里、古澤健、湊博之、西村晋也、吉田良子が監督デビュー、佐藤有記が脚本家としてデビュー。
5月	フィクション・コース第5期初等科修了作品、吉井亜矢子監督『如雨露』がオーバーハウゼン国際短編映画祭に正式招待。 フィクション・コース第5期初等科修了作品、青山あゆみ監督『春雨ワンダフル』がカンヌ映画祭シネフォンダシオン部門に正式招待。
8月	『春雨ワンダフル』が京都学生映画祭で準グランプリ受賞。
10月	『春雨ワンダフル』がみちのく国際ミステリー映画祭角川オフシアター・コンペティションで最優秀賞受賞。
11月	短期講座「ジャン＝ピエール・リモザン特別講義」開講。
2005年	
1月	フィクション・コース第5期高等科修了作品、保坂大輔監督『世界は彼女のためにある』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭オフシアター・コンペティション部門で審査員特別賞を受賞。
10月	研究科で講評を受けた自主制作作品、加藤治代監督『チーズとうじ虫』が山形国際ドキュメンタリー映画祭「アジア千波万波」部門に招待され、小川紳介賞と国際批評家連盟賞を受賞。
11月	フィクション・コース第7期初等科修了作品、村山圭吾監督『モリムラ』がみちのく国際ミステリー映画祭角川オフシアター・コンペティション部門で最優秀賞受賞。
12月	『チーズとうじ虫』がナント3大陸映画祭（仏）ドキュメンタリー部門で最優秀賞を受賞。
2006年	
2月	フィクション・コース第6期高等科修了作品、横浜聡子監督『ちえみちゃんとこっくんぱっちょ』がCO2オープンコンペ部門で最優秀賞を受賞。
4月	『チーズとうじ虫』がアルバ国際映画祭（伊）ニュービジョン部門、ニヨン国際ドキュメンタリー映画祭（スイス）に招待。 『ちえみちゃんとこっくんぱっちょ』がニッポンコネクション（独）に招待。
11月	研究科生とのコラボレーション作品、青山真治監督『AA』が公開。
2007年	
1月	『チーズとうじ虫』が Invitation AWARDS ドキュメンタリー賞受賞。
4月	研究科生とのコラボレーション作品、植岡喜晴監督『ルック・オブ・ラブ』が香港映画祭、ニッポンコネクション（独）、全州映画祭（韓）に招待。
2008年	
3月	フィクション・コース第9期高等科コラボレーション作品、高橋洋監督『狂気の手』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭フォーラムシアター部門に招待。
9月	フィクション・コース第9期初等科修了作品、竹内洋介監督『せぐつ』、フィクション・コース第10期初等科修了作品、古田円香監督『交わる』がショート・ショート・フィルム・フェスティバルのアジアコンペティション部門に招待。
2009年	
2月	フィクション・コース第9期高等科修了作品、大畑創監督『大拳銃』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭のオフシアター・コンペティション部門で審査員特別賞を受賞。
7月	『大拳銃』が PFF に入選し審査員特別賞を受賞。また韓国富川国際ファンタスティック映画祭に招待。
2010年	
2月	中央区京橋 1-7-1 戸田ビルディング 1 階に移転。
12月	渋谷区円山町 1-5 KINOHAUS に移転。オーディトリウム渋谷を開設。
2011年	
5月	フィクション・コース第11期高等科コラボレーション作品、井土紀州監督『土竜の祭』、フィクション・コース第11期高等科助成金作品、内藤瑛亮監督『先生を流産させる会』がニッポンコネクション（独）に招待。

5月	アクターズ・コース、脚本コースを開講。 フィクション・コース第13期初等科修了作品、本田雅英監督『恐竜いらない』がTOHO シネマズ学生映画祭ショートフィルム部門でグランプリと観客賞を受賞。 7月 フィクション・コース第 14 期初等科ミニコラボ作品、篠崎誠監督『死ね！死ね！シネマ』が韓国富川国際ファンタスティック映画祭に招待。 11月 フィクション・コース第 13 期初等科修了作品、伊野紗紀監督『正当防衛』が日本芸術センター映像グランプリを受賞。
2012年	
3月	研究科で講評を受けた自主制作作品、奥谷洋一郎監督『ソレイユのこどもたち』が山形国際ドキュメンタリー映画祭 2011「アジア千波万波」部門にて特別賞を受賞。また Cinéma du Réel 映画祭（仏）に招待。 5月 『死ね！死ね！シネマ』、フィクション・コース第 11 期高等科修了作品、富永圭佑監督『乱心』、フィクション・コース第 13 期初等科修了作品、磯谷渚監督『わたしの赤ちゃん』がニッポンコネクション（独）に招待。 『正当防衛』が横浜映像天国 2012 にて審査員賞を受賞。 西山洋市監督『kasanegafuti』、古澤健監督『love machine』、高橋洋監督『旧支配者のキャロル』が「コラボ・モンスターズ!!」として公開。 『先生を流産させる会』が公開。 7月 批評家養成ギブス（主任講師・佐々木敦）を開講。 フィクション・コース第13期初等科修了作品、久保裕章監督『LESSON』が、ひめじ国際短編映画祭 2012 にてグランプリを受賞。 10月 フィクション・コース第14期 高等科コラボレーション作品、篠崎誠監督『あれから』が第25回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門に正式出品。
2013年	
3月	『ソレイユのこどもたち』が、杭州アジア映画祭の Best of Fests 部門で上映。 『あれから』、脚本コース第 1 期映像化作品、大九明子監督『ただいま、ジャクリーン』が公開。 7月 『ソレイユのこどもたち』が公開。 11月 フィクション・コース第13期高等科修了作品、伊乃沙紀監督『反駁』が第 7 回田辺・弁慶映画祭コンペティション部門東京国際映画祭特別奨励賞を受賞。
2014年	
3月	フィクション・コース第16期初等科修了作品、上野皓司監督『泥人』が調布映画祭 2014第17回 ショートフィルム・コンペティショングランプリを受賞。 フィクション・コース第 16 期初等科修了作品、登り山智志監督『ぼっち』が第 8 回 TOHO シネマズ学生映画祭ショートフィルム部門グランプリを受賞。 5月 2015 年度高等科コラボレーション作品、万田邦敏監督『イヌミチ』、脚本コース第 2 期映像化作品、大工原正樹監督『坂本君は見た目だけが真面目』が公開。 9月 ドキュメンタリー・コース 2010 年度初等科修了作品、忠地裕子監督『おとなのかぐく』が公開。 『泥人』が、第 18 回水戸短編映像祭コンペティション部門にて「水戸市長賞」（準グランプリ）を受賞。 フィクション・コース第 13 期高等科助成金作品、磯谷渚監督『天使の欲望』が、レインダンス映画祭 feature films 部門（英）、カメラジャパンフェスティバル 2014（蘭）にて上映。 11月 文化庁平成26年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「16 ミリフィルムによる映画制作者育成ワークショップ」を開講。 『イヌミチ』他、映画美学学校制作作品が韓国 INDIEPLUS にて上映。
2015年	
4月	「Acting in Cinema 映画の演技を学ぶワークショップ」（講師：万田邦敏・西山洋市）開催。
5月	フィクション・コース第 17 期初等科修了作品、横山翔一監督『たちんぼ』が第 27 回東京学生映画祭 Filmark 賞を受賞。
9月	文化庁平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業「映画・演劇を横断し活躍する俳優養成ワークショップ」を開講。以降毎年9月に開講。 アクターズ・コース第 1 期高等科作品、鈴木卓爾監督『ジョギング渡り鳥』が第 37 回びあフィルムフェスティバルにて公式上映。

10月	『たちんぼ』、フィクション・コース第 17 期初等科修了作品、中村佳寛監督『姉と弟』が第 10 回札幌国際短編映画祭・ジャパンオフシアター「才気溢れる衝撃作品」部門に入選。
2016年	
2月	ゆうばり国際ファンタスティック映画祭にてフィクション・コース第 17 期高等科コラボレーション作品、保坂大輔監督『お母さん、ありがとう』、『たちんぼ』が正式上映。
3月	『ジョギング渡り鳥』が公開。
5月	『お母さん、ありがとう』『世界は彼女のためにある』がニッポン・コネクション（独）にて正式上映。
10月	『ジョギング渡り鳥』が第 26 回映画祭 TAMA CINEMA FORUM にて第 8 回 TAMA 映画賞特別賞を受賞。
2017年	
3月	フィクション・コース第 17 期高等科修了制作作品、横山翔一監督『はめられて Road to Love』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2017 オフシアター・コンペティション部門にて北海道知事賞を受賞。
10月	フィクション・コース第19期高等科コラボレーション作品、高橋洋監督『霊的ポリシェヴィキ』がチョルラ映画祭（メキシコ）にて正式上映。
2018年	
2月	『霊的ポリシェヴィキ』が公開。
3月	フィクション・コース第20期初等科修了制作作品、西本達哉監督『ナナちゃん、oh main got しょ♡』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭にて正式上映。
6月	『霊的ポリシェヴィキ』がニッポンコネクション 2018 にて正式上映。
7月	『霊的ポリシェヴィキ』がプチョン国際ファンタスティック映画祭にて正式上映。
8月	アクターズ・コース第 2 期高等科作品、鈴木卓爾監督『ゾンからのメッセージ』が公開。
11月	フィクション・コース第21期初等科修了制作作品、常間地裕監督『なみぎわ』が西東京市民映画祭2018で最優秀作品賞を受賞（他、各映画祭にて受賞）。山本十雄馬監督の『灰の蛇』が優秀作品賞を受賞。
2019年	
4月	『ナナちゃん、oh main got しょ♡』が島ぜんぶでおーきな祭 第 11 回沖縄国際映画祭クリエイターズ・ファクトリー部門グランプリを受賞。
2020年	
9月	フィクション・コース第 20 期高等科修了制作作品、成瀬都香監督『泥』がゆうばり国際ファンタスティック映画祭 2020 にて正式上映。
11月	『泥』がソウル国際ブライド映画祭にて正式上映。
	フィクション・コース第 22 期初等科修了制作作品、団塚唯我監督『愛をたむけるよ』が第 24 回うえた城下町映画祭大賞、山形国際ムービーフェスティバル 2020 グランプリ、福井映画祭 14TH 審査員特別賞を受賞。
2021年	
6月	フィクション・コース第 19 期高等科修了制作作品、藤本英志朗監督『三崎家の設計』がショートショートフィルムフェスティバル & アジア 2021 にて正式上映。
7月	言語表現コースことばの学校（主任講師・佐々木敦）を開講
9月	フィクション・コース第 22 期初等科修了制作作品、岩崎敢志監督作品『転回』が第 43 回びあフィルムフェスティバルにて審査員特別賞を受賞。
10月	フィクション・コース第 20 期高等科助成金作品、小濱匠監督『恋愛準々決勝戦』が公開
2022年	
5月	『転回』が第 22 回ニッポンコネクションにて正式上映。
9月	フィクション・コース第 24 期初等科修了制作、田之上裕美監督『裸足』がなら国際映画祭フェスティバル 2022 NARA-wave 部門にて正式上映。
2024年	
7月	フィクション・コース第 24 期高等科修了制作作品畔柳太陽監督『松坂さん』、第 24 期高等科助成金作品、田之上裕美監督『はなとこと』がSKIP シティ国際 D シネマ映画祭国内コンペティション部門にて正式上映。『はなとこと』が優秀作品賞を受賞。
9月	『松坂さん』が第 46 回びあフィルムフェスティバルにて審査員特別賞を受賞。
2025年	
2月	『松坂さん』が第 16 回下北沢映画祭にてグランプリを受賞。

映画美学校フィクション・コース第29期初等科 募集要項

■ 受講期間：2025年9月10日(水)から2026年8月末まで。

■ 受講資格：18才以上(学歴、経験の有無は問いません)。

■ 定員：66名

■ 講義日程：週2～3回。原則として月・水の夜間もしくは土日祝日で講義を行います。

※カリキュラム日程の詳細は事務局にお問い合わせください。

※講義は全て日本語で行います。他言語でのフォローは致しかねますので、ご了解の上お申込みください。

※実習によっては、月・水以外の平日夜間に行う場合がございます。

※プロットやシナリオの執筆、課題の制作は講義以外の時間に各自が行います。

※講師の都合により、講義日程や講師に変更の可能性があります。ご了承の上お申し込みください。

■ 受講料：409,000円(税込) ※一括納入が原則ですが、ご希望の方には分割払いでのお支払いも案内いたします。

■ 入学登録料：10,000円(税込) ※映画美学校通年講座をはじめて受講される方のみ

■ 保険料：9,000円(税込)

※受講料の分割払いでのお支払いにつきまして

総額428,000円(受講料409,000円・入学登録料10,000円・保険料9,000円)

219,000円を前払い(入学登録料がかからない方は209,000円) 残額209,000円が分割払いになります。

お支払回数	金利	合計金額	前払金	残額	分割払利息	分割支払金合計	毎月の引き落とし金額
5	4.20%	428,000	219,000	209,000	8,780	217,780	43,556
10	7.00%	428,000	219,000	209,000	14,630	223,630	22,363

(単位：円／税込)

■ 講義場所：映画美学校(渋谷区円山町)／講義・実習は基本対面で実施。ただし都合によりオンラインと併用する場合があります)

■ 申込締切：2025年8月20日(水)まで(尚、締切日以前に定員に達した場合は申込受付を締め切らせて頂きます)。

■ 申込方法：オンラインによる申込

申し込みはこちら

映画美学校ホームページよりお申し込みください。

簡単な選考のうえ、合格者には、合格通知と受講手続きのご案内を、
申込受理から一週間以内にメールまたは郵送いたします。



■ 受講手続：合格通知に記載されている受講手続きに従い、受講料をお振込ください。入金が確認された時点で申込み受付完了となります。その後「早めに申し込んだ人ほど得するレッスン・プログラム」を郵送いたします。

※講義開始に関わらず、申込者の自己都合での解約による受講料の返金は原則お断りいたします。ただし、疾病等、本校がやむを得ないと認める事由についてはご相談に応じます(詳しくは映画美学校約款をご参照ください)。

■ お申込み・お問い合わせ

映画美学校

〒150-0044 東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS B1F

電話：03-5459-1850 FAX：03-3464-5507 受付時間(月～土) 12:00～20:00 HP：www.eigabigakkou.com

映画美学校約款

■ 受講上のご注意

- ◎講義の写真撮影、録画、録音はご遠慮ください。
- ◎持病のある方、あるいは体調不良になられた方は事務局にご相談下さい。
- ◎講義の際に使われる各種の機材・備品などの取り扱いには十分に注意して下さい。機材や備品を大切にすることは映画づくりの基本です。
- ◎館内での私物の管理は、各自で責任を持って行って下さい。賠償の責は負いかねます。また、受講生本人の不注意による事故や物的損害に対しても同様です。
- ◎当校は現役の映画人に講師をお願いしておりますので、講師のご都合またはやむを得ぬ事由により、講師やカリキュラムを変更することがあります。また、交通機関の混乱や、天災地変などやむを得ない事情で、カリキュラムを変更する事があります。
- ◎各コースのカリキュラムは、講師陣により日々検討を重ねております。そのため、要項に記載のカリキュラムが若干変更・修正される可能性もございます。変更・修正の際は理由を説明いたします。
- ◎急なカリキュラムの変更等、当校より緊急連絡をさせていただくことがございます。ご登録の氏名・住所・連絡先等に変更があった場合は、すみやかに事務局にお知らせ下さい。
- ◎受講希望者が一定の人数に達しないクラスは、開講を見合わせる場合もあります。

■ 受講取消の扱い

- ◎いったん納入した受講料は、原則としてご返金できません。各講座の予算は講師陣と事務局が協議して慎重に確定いたしますので、その後のキャンセルはカリキュラムの実現に重大な支障を来します。ただ、病気や転勤など、当校がやむを得ないと認めた場合は、開講日以前であれば下記の計算方法でご返金いたします。その場合、医師による診断書や勤務先の辞令（コピー可）など、受講不可能となった事由を証明する書類をご提出下さい。

受講開始日より起算した返金額

30日前まで：全額の90%

29日前～14日前まで：全額の75%

13日前～7日前まで：全額の50%

6日前～1日前：全額の25%

なお、講義開始後のお申し出は、お受けできません。

■ 安全面について

- ◎映画の撮影時には、スタッフ、キャストともに目の前のことに集中するので、事故が起こりやすいものです。事務局から配布される注意事項をよく読んで厳守し、撮影にかかわる人たちが安全面に配慮することで、絶対に事故を防ぐようにして下さい。将来、講座修了後も、映画を制作し続ける限り、一番大切なことです。なお、注意事項に書かれていないことは、遠慮なく事務局にご相談下さい。
- ◎非常口、避難通路などは事前にご確認下さい。災害が発生した場合は、必ず係員の指示に従って行動して下さい。

■ 著作権について

- ◎本校のカリキュラムの一環として制作された画像、動画、サウンド等の著作権は基本的に映画美学校に帰属します。従って、それらの全部又は一部および、授業風景等を録画・録音したものの全部又は一部を、本校の広報・業績・紹介目的のため、任意かつ無償で利用することがあります。その際、著作者の氏名の表示を省略することもあります。諸般の事情により支障のある方は、開講してなるべく早い時期に事務局にご相談下さい。なお、利用にあたっては、第三者の著作権、商標、名誉、信用、肖像権その他の権利を侵害しないように細心の注意を払います。

● お申込み・お問合せ

特定非営利活動法人 **映画美学校**

〒150-0044

東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS B1F
(渋谷・文化村前〈松濤郵便局前〉交差点左折)

TEL 03-5459-1850 FAX 03-3464-5507

<http://www.eigabigakkou.com>

受付時間(月～土) 12:00～20:00

